君と俺との最後の１ヶ月

沖荒　夢滝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と俺との最後の１ヶ月

【Ｎコード】
Ｎ７４７７Ｚ

【作者名】
沖荒　夢滝

【あらすじ】
初めての恋愛小説です。
天使との最後の一カ月の日記帳です

毎週土曜午後７時更新です

第1話　ハジマリ（前書き）

初めての恋愛ものです。
どうぞよろしくです

第１話　ハジマリ

ある日現れた俺の天使・・・
だが、その天使には、俺との別れがある。
その天使の名は莢間（さやま）美月（みづき）。
今月いっぱいで海外に行ってしまう
だから、最後の一ヶ月くらい一緒にいてやりたい、そう俺は思っている

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

４月８日
「えっと、俺のクラスは・・・・・・あった！３組だな」
中三になった俺、飛騾馬海斗（ひらばかいと）はクラス分けの名簿を見て、自分が３組だというのが解ったので、美月の名前を探した。
「あった！海斗と一緒だぁ〜」
聞きなれた声のほうを向くと、そこには美月がいた。

「おう美月！　また一緒だな」
「うん！やったね！」
美月の眼は輝いていた。
それを見ると、なんだかさびしく思えた。

「どうしたの海斗？」
キョトーンとした表情で美月がこっちを見る
「いや、何でもないよ」

教室
先生がつかつかとはいってきてこう言った
「担任の加藤弘司です、宜しく」

とだけ言って、その後は3年の行事のことなどについてつまらない話が続いて、その日の学校は終わった。

「でさー、すごかったんだぜ？」
男子の何人かが俺のところでごちゃごちゃと話している。
「わかったわかった」
俺はそっけない返事を続けていた。
「よし、じゃあ帰るか」　その言葉が終わるか終わらないうちに・・・

「かーいと！　一緒にかえろ！」
「あっ、ちょっ　美月～～」
この天使、結構ＫＹである。

すると友達が気を使い（？）
「おおっと、俺たちはお邪魔かな？」
「じゃなー海斗、ごゆっくり」
俺の友達もＫＹであった。（やれやれ）
ニヤニヤしながら帰って行った。

「ったく、あいつら・・・」
でも、美月がお構いなしに
「かえろ！」
と言った。

「ふ～、帰るか」

帰り道・・・
「なあ美月」
「なぁに？　海斗」

「おまえおれになんか隠してねぇ？」
「・・・」
「隠してるんだな、それくらいはわかるわ」
「・・・うん」
「？　なんだ？　いってみろ！！」

「でも・・・」
「気になるから言えって！」

「・・・じゃあ言うね・・・・・・私、来月アメリカに行く」
「な！？」

どうする！？　海斗！

第2話　ナクナヨ

それは突然のことだった。
残されたタイムリミットはあと２３日
その中で、俺のできることとは一体！？

しばらく茫然としていると、美月が泣きだした。
「わたし、わたし、本当のこと言えなくて・・・海斗に言いたくなくて・・・・・・ううっ・・・うぐっ・・・ひぐっ」
なぜなんだ、いつもそばにいるのがなぜ美月なんだ？
俺と出会ってしまって、美月はこんなつらい目にあってしまう・・・
この情けない自分を呪った。
でも、頭の中は美月でいっぱいで・・・
今はただ、俺が口にできた一言は、
「美月・・・ごめんな・・・」
だけだった。

美月は
「うぐっ・・・ひぐっ・・・海斗がなんであやまんの？」
泣きながら問いかけてきた。
「そっそれは・・・」
「わたしは海斗と会えて幸せだよ・・・」
「美月・・・・・」
いつの間にか美月は泣きやみ、俺ににこりと微笑みかけてきた。
なんだかとてもさみしい気持ちでいっぱいだった

「よーしわかった！　これからの２３日間、俺がお前の一生の宝になる２３日にしてやる！　ついてきな！」
「うん！　海斗、かっこいいね」

美月はうれしそうに微笑んだ。

こうして俺と美月との長く短い一ヶ月は始まった。

第3話　ドッチノホウガ？

おれの天使との長く短い一ヶ月はこうして始まった。
でも、この一カ月は波乱万丈すぎる一カ月になった。

４月１０日
思わぬ転機が・・・
俺が言うのもなんだが、俺はけっこーもてるみたいだ・・・
バレンタインにはチョコ５個ぐらいもらうし、しょっちゅう告白されるし・・・
でも美月には、俺から好きになって、俺から告った。
それはいいとして、今日は日直だったため、そうじ当番をやらされた。
日直のもう一人に大いに問題ありであった。　もう一人はクラスで一番モテモテの神皐葵（かみさわあおい）ちゃんだった。
～掃除中～
「・・・」「・・・」
しばらく無言が続いた。
「「あの」」
「「あっ」」
二言もはもった。
おれが、「神皐さんは好きな人いるの？」と聞くと、
葵ちゃんは
「うん」
と言った。
《まてよ・・・なぜこんなこと俺は聞いてるんだ？　いや、その前に好きな人いるなんて普通の男子に言うか？》
頭の神経を張り巡らせて、ごちゃごちゃして、髪の毛をくしゃくしゃとしていたら・・・

「飛騾馬君はいるの？　好きな人？」
と葵ちゃんは聞いてきた。

「え！？・・・うん・・・一応、かな・・・」
とまでは言った。　当然美月のことだ、すると！？
「その子と私って、どっちのほうがかわいい？」
「え！？」
《！？　なんつー質問しやがるんだ！！》
「あ、ううん、何でもないよ、気にしないで・・・掃除しよっ」
「うん・・・」
《え！？この反応って・・・》
一瞬ドキッとした俺だった。

第3話　ドッチノホウガ？（後書き）

次回、ドキドキの展開！？

第4話　コクハク

「・・・あのさっ・・・」
「なに？　飛騾馬君」

「さっきのあれって・・・」
「ううん、ちっちがうの！！」
「え？」
「ちょっと気になっただけだから、気にしないでっ」
顔を朱に染めて葵ちゃんは言った。
《てか、なんで俺はこんなこと！！》

「そっか・・・」
「うん」
「・・・でも、さっきの質問、答えは葵ちゃんだよ」
「ええ！？」

《おいおい！　なにいい雰囲気出しちゃってるんだ自分！！　俺が好きなのは美月だろ！　これって浮気に入るやないか！！》
髪の毛をくしゃくしゃしながらも、落ち着きを取り戻し、掃除を続けた。
すると葵ちゃんが・・・
「私の好きな人は、このクラスにいるの」
「え！？　てか、それは俺に言っちゃだめな情報じゃん」
「でも、私の好きな人は私の目の前にいるから！」

「へ！？」

「どっどういう！？」

「だから！　私の好きな人はあなただよ！」

ズキュ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ン！！！

「！？！？！？！？！？！？！？！？」

「飛騾馬君、私のこと嫌い？」

「そっそんなわけ！」

「じゃあ好きなんだ！！」

「・・・」

「私と付き合ってくれる？」

どうする！？海斗

第5話　ドッチ？

「私と付き合ってくれる？」

「・・・・・・ごめん！！　無理」

「！？　なんで？」

「実は、俺は茨間美月と付き合ってるんだ」

「茨間さんより私のほうがかわいいでしょ！」

「違う！！！　み、美月はそういうんじゃない！！　かわいさなら負けてるけど、おれは美月のほうが好きだ、理屈とかそういう問題じゃないんだ」

「なんで！？　茨間さんのどこがいいの？」

俺はまごうことなく

「全部」

と言った

「まあ、とにかく掃除続けようぜ」

《クソォー　きんちょーで心臓つぶれるかと思ったわ》

ドキドキしながら　掃除を続けた。

次の日、４月１１日

「おはようッス」

教室に入ると、男子が一斉にあつまってきた。
「よぉー海斗、どうだった？昨日は？」
「あぁ？」
「掃除の時間だよー、なんか展開あったか？」
「・・・いや、特にない」
「妙なことしてなーだろーな」
「？」
「だから、告ったりしてねーだろーな」
《むしろその逆だ》

「ないって」
「えー、絶対おまえら付き合ってるって噂があったのに」
「そんなの信用するな」

昨日、あんなことがあったなんてなー

次回、新章始動！

第6話　ソウドウ

少しでも、少しでも俺は葵ちゃんに浮気したのか？
頭の中をもやもやが走り渡る。

もやもやしながら俺は教室を出た。
すると！
廊下には葵ちゃんと何人かの女子がいた。
「ちょっとごめんよぉー」
間を割って俺は廊下に出た。

「ねぇ、ちょっと待ってよ」
「？　あぁ？」
「・・・ちょっと来なさい」
クラスの女子何人かに連れられて、屋上まで来た。

「さて、と」
「・・・あのー、俺便所行きたいんだけど・・・」
「まずはこっちが先よ！」
すごいオーラが漂っていて、ここで逃げたら完璧ボコされると鈍感な俺でさえもわかった。
「・・・はい」

「フー・・・ちょっとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」

「！？！？」

「あんた昨日葵ちゃん振ったんだって？」
「あり？　もう知っちゃったの？」

「さっき聞いたのよ！！」
「ふーん」
「なんでふったのよっ！」
「なんでって・・・好きじゃないから！」
その女子はあきれた顔をして、
「あんたは馬鹿？」
「？　ちがうわ」

「良いじゃない葵ちゃんなら」
「だって・・・ねぇ」
「なんで？　他に好きな人でもいるの？」

「・・・」
「いるのね？」
「・・・びみょーにだけど・・・」

びみょーどころではなく、純愛しているよな・・・
そう思いながら、女子の話を聞いた。
でも、告られてから何故だか気持ちが傾いてるのも確かだ。
「！」
「どうしたの？」
「わりぃ、便所！！」
俺は駆け足で階段を下りる。
突然、おれは階段から足を踏み外し、宙を舞う。
「うわぁー！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7477z/

君と俺との最後の１ヶ月

2012年1月14日19時56分発行